栄養教諭免許保持者の特徴と栄養教育実習の 受け入れに関する課題

——栄養教諭免許非保持者との比較——

長幡（伊藤）友実¹⁾，松田 充代²⁾，伊能由美子¹⁾
赤松 利恵³⁾，藤原 葉子³⁾

¹⁾ お茶の水女子大学 SHOKUIKU ステーション

²⁾ 東京都教育庁都立学校教育部学校健康推進課

³⁾ お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

Characteristics and Problems with Accepting the Teaching Practices by Licensed Teachers for Diet and Nutrition Compared with Unlicensed Teachers

Tomomi Ito-Nagahata¹, Michiyo Matsuda², Yumiko Iyoku¹,
Rie Akamatsu³ and Yoko Fujiwara³

¹Shokuiku Station, Ochanomizu University

²Metropolitan School Education Division, School Health Care Promotion Section,
Tokyo Metropolitan Office of Education

³Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

Japan's diet and nutrition teacher system began in 2005, and the problems of accepting the teaching practices by diet and nutrition teachers have not been fully investigated. This study compares the characteristics and problems of this acceptance by licensed teachers for diet and nutrition and unlicensed teachers. A questionnaire survey was distributed to 1,627 diet and nutrition teachers and school nutrition personnel in Tokyo. Half of the licensed diet and nutrition teachers were in their 50s and had more than 30 years of experience in nutrition education. Many of the diet and nutrition teachers responded "not true" and "not often true" to the question "I don't have the skills necessary to accept the teaching practices for diet and nutrition teachers." The percentage response of "I accept" to the question "In the future, will you accept the requests for the teaching practices for diet and nutrition teachers?" was higher from the licensed teachers than from the unlicensed teachers ($p < 0.001$). The results show that future study is needed on the characteristics and problems of the acceptance of teaching practices by licensed teachers for diet and nutrition and on the methods to reduce them.

Jpn. J. Nutr. Diet., 68 (3) 208~212 (2010)

Key words: diet and nutrition teacher, school nutrition personnel, teaching practices, *shokuiku*, guidance on food

緒 言

近年，食生活を取り巻く社会環境が大きく変化し，子どもの食生活の乱れが指摘されている。子どもが将来にわたって健康に生活していけるよう，食の自己管理能力や望ましい食習慣を身につけさせることが必要となっている。そのため，学校における食育を推進する中核的な役割を担う栄養教諭制度が創設され，平成17年4月から施行されている。栄養教諭が給食管理と食に関する指導

を一体のものとして行うことにより，教育上の高い相乗効果が期待されている^{1,2)}。

栄養教諭免許を取得するためには，管理栄養士または栄養士養成施設を修了し，かつ教職に関する科目単位を修得するか，現職の学校栄養職員で3年以上の在職年数がある場合は，大学等の免許法認定講習において，所定の単位を修得することで免許を取得できる³⁾。現在は，後者の方法で免許を取得した栄養教諭が多いのが現状であ

キーワード：栄養教諭，学校栄養職員，栄養教育実習，食育，食に関する指導

(連絡先：長幡（伊藤）友実 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学 SHOKUIKU ステーション
電話 03-5978-5752 FAX 03-5978-5751 E-mail ito.tomomi@ocha.ac.jp)

る。修得単位の中には栄養教育実習が含まれており、栄養教諭免許取得には欠かせない実習となっている。教科の教育実習は教科担任が指導するのと同様に、栄養教育実習は、栄養教諭が指導していく立場である。しかし、平成21年4月現在、全国の栄養教諭は2,648名となり、全国の学校への配置が進んでいるものの、都道府県により採用数にばらつきがあり、配置されていない学校も多いのが現状である⁴⁾。そのため、実習の指導は学校栄養職員が行っている場合も多い。これまでに、教科の教育実習の受け入れに関しては、「現場サイドが多忙になり、指導教員の負担が増える」や「学校側の行事日程や教師の研修日程とぶつかってしまう」等の理由から、受け入れを断る可能性もあるという報告があり⁵⁾、実習に関する課題が多々存在するといえる。しかし、栄養教諭制度は、始まって数年しか経過していないため、実習に関する課題について検討した報告はない。

前述したように、栄養教諭が配置されていない学校はあるが、実際には栄養教諭免許を取得している学校栄養職員もいるのが現状である。学校栄養職員であっても、栄養教諭免許保持者は自身も栄養教育実習を受けていることから、免許非保持者と比較し、実習受け入れの課題に対する考え方が異なると考えられる。そこで、本研究では、栄養教諭免許保持者の特徴を調べるとともに栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題について検討することとした。また、それを明確化するために、免許非保持者との比較を行った。

方 法

1. 調査対象者および調査方法

2008年11月～12月、東京都内の栄養教諭および学校栄養職員（非常勤も含む）1,627名を対象に、無記名・自己記入式質問紙調査を行った。質問紙は東京都教育庁を通じて、東京都区市町村立小・中学校および東京都立定時制高等学校、特別支援学校、共同調理場に配布した。調査への参加は、参加者の自由意思が尊重され、倫理的な配慮がされていること、また、プライバシーの保護に関しては、データは個人が特定できないように統計処理され、本研究の目的以外には使用されないことを別紙に明記し、質問紙と同時に配布した。なお、本研究は、お茶の水女子大学生物医学的研究の倫理特別委員会の承認を得て実施したものである。

2. 調査内容

属性は、性別、年齢、勤務している学校の所在地、勤務場所、雇用形態、職年数、管理栄養士免許の有無、栄養教諭免許の有無たずねた。栄養教育実習を引き受けるにあたっての課題については、「栄養教育実習を引き受けるにあたってどのような課題があると思いますか」とい

う質問に対し、1. 管理職の協力がなかなか得られない、2. 他の教職員の協力がなかなか得られない、3. 管理職が栄養教育実習のねらいをわかっていない、4. 他の教職員が栄養教育実習のねらいをわかっていない、5. 実習内容を学校の年間計画に合わせにくい、6. 事前に実習生と打ち合わせする時間が十分でない、7. 実習期間中にどんな実習内容を行えばよいかわからない、8. 実習生を引き受けるために十分なスキルが自分に足りない、9. 実習生を引き受ける時間的余裕が自分にない、以上9項目を設け、すべて4段階評価（よくあてはまる、あてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない）とした。これら9項目は、2008年10月にお茶の水女子大学で開催された食育シンポジウムにおいて、栄養教育実習の関係者（校長、家庭科教員、栄養教諭、学校栄養職員、大学教員、大学生等）37名を対象に行われたワークショップ「栄養教諭実習を考える」をもとに作成した。対象者を4～5人ずつの8グループに分け、ブレインストーミングおよびバズセッションを行い、栄養教育実習の課題を抽出した。その課題は、主に、栄養教育実習受け入れ校における課題、栄養教諭養成施設における課題、栄養教諭制度に関する課題に分けることができ、本調査では栄養教育実習受け入れ校における課題9項目を採用した。また、「今後、栄養教育実習の依頼があった場合、引き受けますか」という項目について3段階評価（引き受けると思う、わからない、引き受けないと思う）の回答を設けた。その他、栄養教育実習を引き受けるにあたって必要なスキル、栄養教育実習生を引き受けた際の学校や自分自身の変化、栄養教育実習生の受け入れ経験、自身の栄養教諭免許取得方法についてたずねた。

3. 解析方法

欠損値は項目ごとに除外し、解析にはSPSS 16.0 for Windowsを用いた。栄養教諭免許保持者、非保持者別に、属性、栄養教育実習を引き受けるにあたっての課題、今後栄養教育実習を引き受けるかについて、クロス集計およびカイ二乗検定を行った。栄養教育実習を引き受けるにあたっての課題については、「よくあてあてはまる、あてはまる」と「あまりあてはまらない、あてはまらない」の2群に分け解析を行った。統計的有意水準は5%を採択した。

結 果

1) 対象者の属性

1,627件配布し、回収件数は1,107件であった（回収率68.0%）。そのうち未記入のもの、回答に矛盾のみられたものを除いた1,078件を解析対象とした（有効回答率97.4%）。

表1 栄養教諭免許の有無別にみた属性

属 性		全 体 (人)	免許の有無	
			有 (人 (%))	無 (人 (%))
性 別	男性	41	10 (2.5)	31 (4.6)
	女性	1,031	387 (97.5)	644 (95.4)
年 齢	20歳代	210	43 (10.9)	167 (24.9)
	30歳代	223	65 (16.4)	158 (23.6)
	40歳代	166	54 (13.6)	112 (16.7)
	50歳代	408	211 (53.3)	197 (29.4)
	60歳代以上	59	23 (5.8)	36 (5.4)
学 校 で の 栄養士職年数	10年未満	433	80 (20.5)	353 (53.1)
	10年以上20年未満	177	63 (16.2)	114 (17.1)
	20年以上30年未満	113	57 (14.6)	56 (8.4)
	30年以上	332	190 (48.7)	142 (21.4)
勤 務 場 所	小学校	687	273 (70.0)	414 (61.8)
	中学校	260	87 (22.3)	173 (25.8)
	定時制高等学校	32	5 (1.3)	27 (4.0)
	特別支援学校	38	17 (4.4)	21 (3.1)
	共同調理場	43	8 (2.1)	35 (5.2)
雇 用 形 態	学校栄養職員	771	360 (90.5)	411 (61.0)
	栄養教諭	5	5 (1.3)	0 (0)
	非常勤栄養士	296	33 (8.3)	263 (39.0)
管理栄養士の 資 格	有	397	187 (47.1)	288 (42.7)
	無	674	210 (52.9)	386 (57.3)

注1) 各項目について、栄養教諭免許の有無別に人数を示し、() 内に栄養教諭免許の有無ごとに100%となるようパーセンテージを示した。

注2) 欠損値は項目ごとに除外した。

解析対象者(1,078名)のうち、栄養教諭免許保持者は398名(36.9%)であった。表1に、免許保持者と免許非保持者に分けて属性を示した。免許保持者の年齢は50歳代が最も多く53.3%であり、学校での栄養士職年数も30年以上が最も多く48.7%であった。また、免許保持者の雇用形態は90.5%が常勤の学校栄養職員であった。次に免許保持者と免許非保持者を比較すると、年齢については、免許保持者では50歳代の割合が高く、20歳代の割合が低かったが、免許非保持者ではそのような傾向はみられなかった(χ^2 (自由度=4)=69.8, $p<0.001$)。また、学校での栄養士職年数は、免許保持者では30年以上の割合が高いのに対し、免許非保持者では10年未満の割合が高かった(χ^2 (3)=131.0, $p<0.001$)。雇用形態は、免許保持者では90.5%が学校栄養職員もしくは栄養教諭であったが、免許非保持者では学校栄養職員が61.0%であり、39.0%が非常勤栄養士であった(χ^2 (2)=124.3, $p<0.001$)。その他の項目に関しては、有意差はみられなかった。

2) 栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題について

表2に栄養教諭免許の有無別にみた栄養教育実習に対する課題を示した。免許保持者において、50%以上が

「あてはまる」、「よくあてはまる」と回答していた項目は、「4. 他の教職員が栄養教育実習のねらいをわかっていない」、「5. 実習内容を学校の年間計画に合わせにくい」、「6. 事前に実習生と打ち合わせする時間が十分でない」、「8. 実習生を引き受けるために十分なスキルが自分に足りない」、「9. 実習生を引き受ける時間的余裕が自分にない」であった。そして、周囲の環境の問題と考えられる項目よりも、自分自身の問題と考えられる項目の方が「あてはまる」「よくあてはまる」と回答する割合が高い傾向にあった。次に、免許保持者を免許非保持者と比較すると、「1. 管理職の協力がなかなか得られない」、「5. 実習内容を学校の年間計画に合わせにくい」では、肯定的な回答である「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」の割合が高かった(それぞれ、 χ^2 (1)=4.8, $p=0.028$, χ^2 (1)=4.9, $p=0.027$)。また、自分自身の問題と考えられる「6. 事前に実習生と打ち合わせする時間が十分でない」、「7. 実習期間中にどんな実習内容を行えばよいかわからない」、「8. 実習生を引き受けるために十分なスキルが自分に足りない」、「9. 実習生を引き受ける時間的余裕が自分にない」は、免許保持者では免許非保持者と比較し、肯定的な回答である「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」の割合が高

表2 栄養教諭免許の有無別にみた栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題

課 題	免許の有無	全 体 (人)	あてはまらない・ あまりあてはまらない (人 (%))	あてはまる・ よくあてはまる (人 (%))	p 値
周囲の 環境の 問題	1. 管理職の協力がなかなか得られない	有 386 無 641	332 (86.0) 517 (80.7)	54 (14.0) 124 (19.3)	0.028
	2. 他の教職員の協力がなかなか得られない	有 385 無 640	292 (75.8) 451 (70.5)	93 (24.2) 189 (29.5)	0.062
	3. 管理職が栄養教育実習のねらいをわかっていない	有 381 無 637	262 (68.8) 434 (68.1)	119 (31.2) 203 (31.9)	0.833
	4. 他の教職員が栄養教育実習のねらいをわかっていない	有 387 無 639	185 (47.8) 358 (56.0)	202 (52.2) 281 (44.0)	0.011
	5. 実習内容を学校の年間計画に合わせにくい	有 383 無 638	174 (45.4) 245 (38.4)	209 (54.6) 393 (61.6)	0.027
自分自身の 問題	6. 事前に実習生と打ち合わせする時間が十分でない	有 384 無 639	186 (48.4) 226 (35.4)	198 (51.6) 413 (64.6)	<0.001
	7. 実習期間中にどんな実習を行えばよいかわからない	有 390 無 658	204 (52.3) 150 (22.8)	186 (47.7) 508 (77.2)	<0.001
	8. 実習生を引き受けるために十分なスキルが自分に足りない	有 391 無 657	150 (38.4) 98 (14.9)	241 (61.6) 559 (85.1)	<0.001
	9. 実習生を引き受ける時間的余裕が自分にない	有 392 無 662	128 (32.7) 108 (16.3)	264 (67.3) 554 (83.7)	<0.001

注1) 各項目について、「あてはまらない・あまりあてはまらない」、「あてはまる・よくあてはまる」の2群に分けて人数を示し、()内に栄養教諭免許の有無ごとに100%となるようパーセンテージを示した。

注2) 欠損値は項目ごとに除外した。

図1 栄養教諭免許の有無別にみた「今後、栄養教育実習を引き受けるか」に対する回答

注) 栄養教諭免許の有無別に「引き受けると思う」、「わからない」、「引き受けないと思う」に回答した人数をパーセンテージで示した。

かった (順に $\chi^2(1) = 17.0$, $\chi^2(1) = 95.3$, $\chi^2(1) = 74.6$, $\chi^2(1) = 37.8$, すべて $p < 0.001$)。

3) 今後、栄養教育実習を引き受けるか

「今後、栄養教育実習の依頼があった場合、引き受けますか」という質問に対し、免許保持者では、約40%が「引き受けると思う」、約15%が「引き受けないと思う」と回答していた。また、免許保持者では、免許非保持者と比較して「引き受けないと思う」の割合が低く、「引き受けると思う」の割合が高かった (図1, $\chi^2(2) = 99.1$, $p < 0.001$)。

考 察

本研究では、栄養教諭免許保持者の特徴と栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題の考え方について検討するために、東京都の栄養教諭および学校栄養職員に質

問紙調査を行い、免許非保持者との比較を行った。その結果、栄養教諭免許保持者には、50歳代が多く、さらに学校での栄養士職年数は30年以上が多いという特徴がみられた。また、栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題については、周囲の問題と考えられる5項目よりも、自分自身の問題と考えられる4項目の方が「あてはまる」、「よくあてはまる」と回答する傾向にあった。さらに、栄養教諭免許非保持者と比較すると、保持者の方が表2に示した課題に対して肯定的な回答である「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と答える割合が高かった。また、「今後、栄養教育実習の依頼があった場合引き受けるか」という質問に対し、保持者では、「引き受けると思う」と答える割合が高かった。

栄養教諭免許保持者では、栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題が少なく、さらに、栄養教育実習の依

頼があった場合に「引き受けると思う」と回答する割合が高かったことから、栄養教育実習に対する課題の減少と実習受け入れに対する積極的な態度には関連があるものと考えられる。これまでに、学校栄養職員としての勤務年数の長い方が、学校において食育を実施している割合が高いという報告⁶⁾がある。本研究の結果から、栄養教諭免許保持者のうち約半数は50歳代であり、学校での栄養士職年数も約半数が30年以上であった。また、栄養教諭免許非保持者と比較し、保持者の方が様々な課題に対して「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」と答える割合が高かったことが示された。このことから、学校における栄養士としての経験の長さが食育に対する考え方を変化させ、それが栄養教諭免許取得、さらには、栄養教育実習に対する課題減少へとつながった可能性が考えられるが、課題減少の直接的な要因については、今後、課題の多い人、少ない人の特徴を詳細に把握する検討が必要であると考えられる。そして、実際に栄養教育実習をよりよいものにしていくためには、課題の多い人に対し、課題を軽減するような方策を講じていく必要があるだろう。

また、本研究は東京都の栄養教諭と学校栄養職員に対して調査したものであるが、東京都は他県と比較して栄養教諭の採用数が少ない⁵⁾。採用数の多い県では、学校栄養職員の栄養教諭免許取得に対する考え方が異なるかもしれないことから、今後、他県においても本調査を行い、栄養教諭免許の有無と栄養教育実習受け入れの課題に対する考え方の関連について論じる必要がある。

現在、大学、専門学校等において栄養教諭の養成が進むとともに、学校栄養職員から栄養教諭への移行が進んでいるが、まだ十分とは言えない。栄養教諭免許を取得するには、所定の単位を取得せねばならず、労力を要するといえるが、その一方、本研究から、栄養教諭の免許保持者では、栄養教育実習の受け入れに対して積極的であることが示唆された。今後、よりよい栄養教育実習を行っていくためには、現学校栄養職員が積極的に栄養教諭免許を取得し、実習に対し自身の経験を生かしていくことが必要であると考えられる。

ま と め

東京都内に勤務する栄養教諭、学校栄養職員1,627名を対象に質問紙調査を行い、栄養教諭免許保持者の特徴と栄養教育実習の受け入れに対する課題について検討した。その結果、栄養教諭免許保持者の特徴として、50歳代が多く、さらに学校での栄養士職年数は30年以上が多かった。また、栄養教育実習を受け入れるにあたっての課題

について、50%以上が「あてはまる」、「よくあてはまる」と回答していた項目は、「4. 他の教職員が栄養教育実習のねらいをわかっていない」、「5. 実習内容を学校の年間計画に合わせにくい」、「6. 事前に実習生と打ち合わせする時間が十分でない」、「8. 実習生を引き受けるために十分なスキルが自分に足りない」、「9. 実習生を引き受ける時間的余裕が自分にない」であり、さらに、周囲の環境の問題よりも自分自身の問題の方が「あてはまる」、「よくあてはまる」と回答する割合が高かった。非保持者と比較すると、免許保持者では栄養教育実習の受け入れに対する課題について「あてはまる」、「よくあてはまる」と回答する割合が低く、さらに、今後の受け入れについて「引き受けると思う」と回答する割合が高かったことから、受け入れに対し積極的であることが示唆された。今後は、課題を多く持つ人に関して、その特徴を把握し、課題を軽減させる方策について検討する必要があると考えられる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました東京都教育庁都立学校教育部学校健康推進課の中山あさ様に厚く御礼申し上げます。なお、本研究は、文部科学省特別教育研究経費「子どもの発達・成長過程を見通した食育の実践と教育プログラムの構築」の Ochanomizu Nutrition Education SHOKUIKU Study (ONESS) として実施したものである。

文 献

- 1) 文部科学省：食に関する指導体制の整備について（答申），http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm，（2009年6月23日）
- 2) 文部科学省：栄養教諭制度の概要，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyoku/04111101/003.htm，（2009年8月5日）
- 3) 金田雅代：栄養教諭論—理論と実際—，p. 7-9（2007）建帛社，東京
- 4) 文部科学省：平成17～21年度の栄養教諭の配置状況（平成21年4月1日現在）（2009）http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm，（2009年6月25日）
- 5) 柴山 直，高橋桂子，鋤柄佐千子，五十嵐由利子：受け入れ校からみた教育実習の実態調査に関する報告，新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要，2，63-74（2003）
- 6) 鈴木洋子：小学校における家庭科担当教員と栄養職員（教諭）の連携による食育の実態と課題，日本教科教育学会誌，30，9-15（2007）

（受付：平成21年8月7日，受理：平成22年2月19日）